

No.3375 『テスラモーターズ(TSLA)』

足立眞一

2010年6月にテスラモーターズ(TSLA)が公開された。2004年にネット企業 PayPal を売却した資金でイーロン・マスクが起こした企業である。公開価格は17ドルで同年6月16日の初日の引け値は23.89ドルであった。最近、株価は342ドルを記録したので、初値買いの投資家は10倍以上の収益率になった。

最近のウォール街では赤字会社の自動車会社というイメージが消え、利益を出してはいないがエネルギー開発、太陽光発電、移動体通信などの有望分野での成長性が注目され、投資家の評価も大きく変化してきた。公開に先立っての資金調達時にはトヨタ自、パナソニックも投資した。先見の明があったといえる。

いまテスラ株に投資する意味は、現在の1.5兆ドル(160兆円)という世界の自動車産業で生まれた創造破壊的なビジネスに賭ける単純な話でなく、先行き10兆ドル(1120兆円)規模の新交通手段革命に賭けることを意味する。テスラには単なる自動車やその他の移動手手段だけでなく、交通手段の業界を超えて、データ、時間などにかかわる大規模な移動革命の世界に首を突っ込む可能性が考えられるからだ。

これはアダム・ジョナス(モルガン・スタンレーのアナリスト)の見方である。彼は現在、アナリストたちが考えている以上の可能性をテスラの未来に期待している。

今年になってから株価は3年間のボックス圏から脱出した。株価が上げられるまでは、基本的には電気自動車の将来を買うというのが投資家の見方であった。新規公開時には50ドルの壁をなかなか破ることができず、新規公開後の人気に期待した投資家には失望感を買う結果になった。

われわれも公開後に投資したが、ボックス圏での動きに思惑がはずれて売却した。しかし2013年にはいるとウォール街の見方に大きな変化がおり、株価は上昇トレンドに入った。単なるハイテク関連ではなく、新しい分野での自動車関連という評価が出てきた。

年間8万台の電気自動車の製造販売だけでは、なかなか利益が上がらず、利益率は低水準で推移し、量産を実現させる市場への期待観は遠い先のような話になった。そこへ電気自動車でなくUberとLyftが生まれ新しいアイデアで自動運転サービスを提供する企業が輩出し、グーグルは無人運転のビジネスの展開に力を入れ始めた。

しかし最近のウォール街ではテスラが運転の歴史の変革を狙う企業という見方が生まれてきた。同社は最近開発したオートパイロットという自動運転機能の分野に力を入れはじめた。テスラは利益率の低い電気自動車の製造、販売をするが、この市場はまだ小規模である。現在のコアビジネスの電気自動車に固辞するのではなく、新技術の開発で自動車産業の展開に力点を置きはじめた。

現在の収益率は低く、創業者のイーロン・マスクは現在の時価総額500億ドル(5兆6000億円)に満足していない。アマゾン・コムがアップルの追撃に力を入れるような企業をマスクは夢に描いており、テスラ・モビリティやテスラ・ネットワークのような新しいビジネスモデルの創出に進もうとしている。現在の電気自動車メーカーの成長の延長線上では高収益企業への成長は考えられないとみる。

時価総額でGMやフォードを追い抜いた先には、現在とは全く異なった世界に足を踏み入れ、革新的なハイテク企業に育てる野心をマスクは抱いている。

アマゾン・コムがEコマース企業から大きく脱皮したように、テスラモーターズの先行きにも新しい世界が開ける可能性がでてきた。最近の株価の展開が先読みをはじめた。株価のパフォーマンスは第2のアマゾンになる可能性も考えられる。

テスラモーターズ(TSLA)

